

21世紀の大学..職員の希望とリテラシー



## はじめに——この本はどのようにしてできたか

寺崎 昌男

「職員グループから招かれて行なった連続講義の記録を本にして公開できないだろうか」。その願いが実つて、本書の出版準備が始まりました。

研究グループの人たちは、各々の講義記録にエッセイを寄稿し、座談会や編集準備にも参加するなど、協力を惜しみませんでした。その他多くの人の力添えのもとにここに公刊が実現しようとしています。

「大学改革」をテーマにした本はあふれています。私も何冊かの大学関係書を公刊してきました。しかし同じ大学・学院に勤務する人たちに話しかけ、討議し、それをもとにして本をつくるのは初めてのことです。誠に貴重な経験だと感謝しています。

研究グループの人たちは、二〇歳代後半から三〇歳代半の事務職や研究協力職の人たちでした。また本書に名のない聴講者の中には、幾人かの新入職員の顔もあつたことに深い感動を覚えます。一〇年後の立教の命運を左右する人たちだと思われるからです。

連続講義が実現した基盤には、企画した人たちが抱いていた「自分の勤務する大学のことをもっと知っておきたい」という思いがありました(座談会参照)。

二〇一四年の春に初めて声をかけられたとき、私は「毎年人事課から頼まれる新入職員研修講義のようなことを一度話せばいいのだ」と思ったものです。

十数年前には、桜美林大学大学院で、同僚の教員と協力して、現職大学職員対象の「大学アドミニストレーション専攻修士課程」という新課程づくり挑戦しました。二〇〇三年以後一二年間調査役として勤めた立教学院でも、仕事の相手のほとんどは大学・学院の職員の人たちでした。そういう経験があつたので、気軽な返事をしてしまったのです。

他方、中央教育審議会では、その数年前から大学改革答申の中で職員の役割の重大さについて特に強調するようになっていました。また永年私が会員である大学教育学会でも、この数年、急速に職員の入会が増え、課題研究等への貢献も無視できないほど大きくなりました(第1講参照)。そういう状況でしたから、「立教で職員の人たちが勉強したいというのなら応えなくてはなるまい」と、いわば義務感に動かされたような気持ちで出かけたものです。

ところがその後九ヶ月間、一連の講義がやめられなくなり、私自身乗り気のうちに続けてしまいました。参加者の熱意に背中を押されたのでした。

文部科学省では今年(二〇一六年)三月三十一日付で、大学に職員の能力向上を義務付ける条文を、省令・

大学設置基準に加えました。念のため、追加された全文を引いておきましょう。

#### 第四二条の三

大学は、当該大学の教育研究活動等の適切かつ効果的な運営を図るため、その職員に必要な知識及び技能を習得させ、並びにその能力及び資質を向上させるための研修(第二五条の三に規定する研修に該当するものを除く。)の機会を設けることその他必要な取組を行うものとする。

( )内の「第二五条の三」は、「当該大学の内容及び方法の改善を図るための組織的な研究及び教育」を記した、教員向けのFDの実施を要求する規定のことです。すなわち右の四二条の三は、教員向けの研修とは別に、事務職員向けの研修を行うことを大学に義務付けたもので、年度末ギリギリの公布だったためにマスコミの話題にはなりませんでした。

何ごとも「義務化」で押し進めようという行政の姿勢には違和感を覚えます。しかし趣旨そのものは、近代日本の大学の歴史にとって画期的なものだったと言っていいでしょう。明確に表現した法令は、これまでなかったからです。

私は今年(二〇一六年)四月にこの改正を知った時、本書が語る立教の職員の人たちの研究活動が、改正のはるか前から、文字通りボトムアップのスタイルで始まっていたことを、立教大学さらには立

教学院のために大いに自慢したい思いでした。

たとえ省令の定める公的「研修」が行われるようになっても、その地下水として不可欠なのは、このようなボランティア的な勉強と自発的な研究活動です。多くの参加者の皆さんに重ねて感謝し、今後の活躍に大いに期待します。そしてこの本のつくられ方や内容が、日本の大学SD活動のささやかなモデルの一つとして知られるなら、それ以上の喜びはありません。

最後に、二点お断りしておきます。

第一に、講義の順番は実際の順番とは違っていきます。講義は第一回が二〇一四年六月、最終回が二〇一五年二月でした。「他大学の方たちが読まれるとすれば大学に関する共通の話題から入るようになっておく方がいいのではないだろうか」という東信堂のアドバイスで「リテラシー」問題を（実際に）巻頭に起き、立教史の講義を後ろに集めました。

第二に、話の中に学内外の人名が多数出てきますが、肩書きは、すべて二〇一四年度当時のものにしていただきました。

二〇一六年九月

目次／21世紀の大学・職員の希望とリテラシー

はじめに―この本はどのようにしてできたか―……………寺崎 昌男 i

第1講 大学職員にどのようなリテラシーと能力が求められているか

3

- 高まる職員への期待(4)
- 私の職員リテラシー論(10)
- 「大学教育の歴史」を教えて(13)
- 勤務大学への知識と高等教育政策研究(17)
- リテラシーと能力(コンピテンス)との深いつながり(20)
- 幾つかの弱点(27)
- 立教大学の特質(24)
- 望まれる職員のコンピテンス(能力)(32)
- 学生たちへの配慮(30)

## 第II講 「大衆化」の響きを前に

——高まる大学志願率、紛争、そして大学設置基準の大綱化

はじめに(39)

時期区分の難しさ(40)

大衆化の起り(42)

受け止め方の四タイプ(45)

踏み切れなかった立教(48)

大学紛争のこと(51)

日本の大学環境(53)

立教の学生反乱(57)

さまざまな大学の対応(58)

学生たち(60)

「大学設置基準の大綱化」(63)

七〇年代初めの二つの改革(69)

## 第III講 学問環境の変化の中でリベラル・アーツを考える

はじめに(71)

学科の限らない多様化と細分化(72)

学科や学部の変貌(80)

専門重点への移行(81)

求められている専門学の変革(82)

行動化と液状化(83)



## 第Ⅳ講 求められている新しい学力と大学教育の課題

- 学部名とカタカナ(86)
- 知の創造のモード(様式)(92)
- 「不登校」という難問(95)
- 大学院の特徴(99)
- 戦後日本の大学観(103)
- 学部・教授会動向への理解を(108)
- リベラル・アーツのこと(90)
- 教員養成と「モード2」(94)
- 立教の変貌のこと(97)
- 「専門性に立つ教養人の育成」という使命観(101)
- 学部の反応(105)
- デイリーワークの大切さと「外」へのひろがり(110)

- はじめに―調査役一二年(111)
- 文学部での「FD」(113)
- 全カリ運営センター、ランゲージセンター、大学教育開発・支援センター(115)
- 立教の貴重な特色(118)
- 得難い職員の働き(119)
- 大学院での経験(128)
- 授業で気付かされたこと(124)
- 必要ない直しとPIISA型能力(134)
- 個別性の世界と既成の知(132)
- 立教はつづれるか(139)
- わかることの三段階(136)
- グローバリ化のこと(140)
- 大学を生涯学習の場にするという課題(144)
- おわりに(148)

第V講 立教学院の歴史をふりかえる(1) —— 独自性と建学の理念

151

はじめに(151)

立教史の第一歩を見る(154)

ウィリアムズ主教の働き(157)

違いの背景にあったもの(162)

建学の精神のこと(170)

学院史への二回の参加(152)

キリスト教系学校の貢献(156)

訓令一二号事件への対応(159)

立教と英語(165)

おわりに(174)

第VI講 立教学院の歴史をふりかえる(2) —— 戦中・戦後の実態と問題

179

はじめに——立教大学の戦時下研究(179)

戦争小史(184)

教育から錬成へ(190)

マッカーサー指令と幹部追放(195)

むすび(205)

戦時下の展望(181)

国家総力戦というもの(186)

戦時体制化の進行(193)

措置の厳しさについて(202)

## エッセイ集

207

## 第I講

エッセイ① 大学教員と職員との新しい協働のために……………

浅井 亜希

208

リテラシーから生まれる能力(コンピテンス)(208)

全てはその大学の歴史から来る(209)

「プロフェッショナルリゼーション」のために(210)

大学は教員だけが支えているのではない(210)

エッセイ② 大学職員のリテラシーと能力向上の取り組み……………

小川 龍秀

212

自校を知る(212)

「企画力」「コミュニケーション力」「情報収集力」(213)

## 第II講

エッセイ① 分岐点の再認識……………

池田 貴裕

216

大衆化の起こり(217)

大学設置基準の大綱化(218)

大学紛争のこと(218)

大きなUターンの道のなかで(219)

「言葉によって答えた」関係のいま(220)

エッセイ② 大学と学生の信頼関係……………大嶽 宏介 221

分岐点の再認識(221) 言葉の扱いと価値(222)

### 第III講

エッセイ① 学問「環境」の変化への実感……………飯塚 琴乃 224

新学部の意味(224) リベラル・アーツと現代(225)

エッセイ② 知識生産様式とカリキュラム目標……………林 英明 228

はじめに(228) 知識基盤社会における知識生産様式の変化(228)

全学共通カリキュラム発足時の実践的な二つのティップス(229)

大学院による教育および研究の高度化への期待(231)

変化する学問環境における大学職員像(231)

### 第IV講

エッセイ① 「新しい学力」と立教が続けていくこと……………高橋 亜弓 233

学ぶことの本質(233) わかることの三段階(234)

「新しい学力」と職員(235)

エッセイ② 学生の「考える力」育成における立教職員の関わり方……………古瀬 憲弘

学生だったところ(237) 学生たちと職員として(239)

237

233

228

224

221

## 第V講

エッセイ① 語りかける立教の歴史…………… 守田 智晴 241

立教の「建学の精神」とは何か(241) 価値の選択の歴史とこれから(243)

エッセイ② 未来に向けた「価値の選択」…………… 大竹 秀和 244

「キリスト教系大学」としての立教(244)

「キリスト教系大学」の宗教教育における信念の「違い」―訓令一二号事件(245)

ウィリアムズ主教の歩み(246) シンボリックでない「建学の精神(理念)」(246)

未来へ向けた「価値の選択」(247)

## 第VI講

エッセイ① 戦時下の姿から学ぶこと…………… 守田 梨紗 249

なぜ大学は戦争に協力したのか(250) 信教ノ自由侵害ノ件(251)

立教が歩んできた道(252)

エッセイ② 寺崎先生のスマイル完成…………… 林 良知 254

自由な教室(254) 防衛省の研究申請募集(255)

座談会 職員像の探求―「大学人」としての出発を控えて

寺崎昌男・原田久・浅井亜希・大竹秀和・高橋亜弓・林英明・守田智晴

勉強会の由来(258)

大学情報とその収集のこと(265)

既にある職員像のこと(272)

プロフェッショナルリテイの問題(280)

歴史のなかの理念(288)

勉強会が開いてくれた視野と連携(293)

「三つの能力」をめぐる(261)

「周囲を巻き込む」という力(269)

「立教らしい職員像」を考えなくていいか(277)

勤務校についての学習―「自校教育」を受けて(283)

「立教らしさ」は実証できるか?(291)

SDにカリキュラムを(299)

あとがき

執筆者紹介

人名索引

事項索引



## 編著者紹介

寺崎 昌男 (てらさき まさお)

立教大学名誉教授・公益財団法人中央教育研究所特別相談役。

東京大学・桜美林大学名誉教授。前大学教育学会会長。

1932年福岡県に生まれる。1964年東京大学大学院教育学研究科修了。

教育学博士。財団法人野間研究所所員、立教大学文学部、東京大学教育学部、立教大学学校社会教育講座、桜美林大学大学院の各教授を経て、2003年4月から現職。

東京大学在職中に東京大学百年史編集委員会委員長を、立教大学在職中に全学共通カリキュラム運営センター部長を歴任。

## 主要著書

『大学自らの総合力Ⅱ』(東信堂、2015年)、『英語の一貫教育へ向けて』(鳥飼玖美子と監修、東信堂、2012年)、『大学自らの総合力』(東信堂、2010年)、『大学改革 その先を読む』(東信堂、2007年)、『東京大学の歴史』(講談社、2007年)、『大学は歴史の思想で変わる』(東信堂、2006年)、『大学教育の可能性』(東信堂、2002年)、『増補版 日本における大学自治制度の成立』(評論社、2000年)、『大学教育の創造』(東信堂、1999年)、『大学の自己変革とオートノミー』(東信堂、1998年)、『大学教育』(共著、東京大学出版会、1969年)。

## 21世紀の大学：職員の希望とリテラシー

2016年12月 5日 初版 第1刷発行 定価はカバーに表示してあります。〔検印省略〕  
印刷・製本／中央精版印刷

編著者©寺崎昌男・立教大学院職員研究会／発行者 下田勝司

東京都文京区向丘1-20-6 郵便振替00110-6-37828 発行所  
〒113-0023 TEL (03)3818-5521 FAX (03)3818-5514 髯東信堂

Published by TOSHINDO PUBLISHING CO., LTD.  
1-20-6, Mukougaka, Bunkyo-ku, Tokyo, 113-0023, Japan  
E-mail : tk203444@fsinet.or.jp <http://www.toshindo-pub.com>

ISBN978-4-7989-1399-5 C3037 ©TERASAKI Masao